

## 第5章 文化遺産松本ピアノ

松本新吉は、独自のいい音色Sweet tone のピアノを創り出し、その技を継承した新治、新一は、八重原工場で松本ピアノを作り続けてきた。八重原工場は、平成19年4月になくなったが、松本新一【図5-1】は残っていたピアノ13台、オルガン5台を君津市に寄贈した。

ピアノの音色は言い表し難いが、一流のピアノにはそれぞれの音色があることは、リヒテルの言葉にも表現されている。

『楽器の事典 ピアノ』（東京音楽社）「リヒテルの言葉」

・・・スタインウェイは誰が弾いても素晴らしい音が出るが、そのきらびやかさを、特に若い奏者の場合、頼り過ぎる場合が多い。しかし、音楽はそういうものではなく、心の感度を示すものだから、自分としてはこれをうまく表せるものでないと気に入らない。

『楽器の事典 ピアノ』第6章「日本の主要ブランド一覧」の250銘柄ピアノ紹介欄に、八重原工場で作られ続けた「マツモト・アンド・サンズ」の特長が記されている。

『楽器の事典 ピアノ』「日本の主要ブランド一覧」(250銘柄からの抜粋：アイウエオ順)	
S・マツモト： S.MATSUMOTO 松本ピアノ（松本新吉）	松本ピアノが故あって二つに分れたとき、長男広氏のHマツモトに対して父親の新吉氏のSを頭文字として、千葉県君津で製作されていた。伝統の製法は今も引き継がれマツモト&サンズとなって生きている。
エチ・マツモト： H.MATSUMOTO 松本ピアノ（東京）	松本ピアノの創業者松本新吉氏の長男広氏が渡米してピアノ製作技術を学び、千葉に帰った父親とは別に作ったピアノ。
ニシカワ： NISHIKAWA 西川ピアノ（横浜）	日本のピアノ創世期の先駆者の項参照。日本のピアノ工業創始者の一人西川虎吉氏、安蔵氏親子による歴史的ピアノ。材料の多くを輸入に仰いだり、国産第1号とする説も多い。横浜の外国商社との取引が古く、明治23年の内国博覧会で式等賞をとった。大正10年、日本楽器により買収された。
マツモト・アンド・サンズ： MATSUMOTO&SONS （有）松本ピアノ工場（君津市）	日本におけるピアノの先駆者の一人松本新吉氏の六男新治氏の夫人が子息の新一氏とともに作っているピアノで、月産台数は少ないが、極めて音の美しいピアノである。

（注）ヤマハ、カワイは『楽器の事典 ピアノ』第4章「日本の代表的な二大ブランド」で記載、西川ピアノ、松本ピアノは「創世期の先駆者たち」で記載。

『楽器の事典 ピアノ』の音色寸評で、このように称えたピアノは250銘柄中、数例のみである。

#### コラム⑤ 松本ピアノの音色

『楽器事典・ピアノ』の「ピアノの音」に関して」記事の一部：

ピアノの音質は、他の諸楽器と比較した場合、最も複雑で難解なものといわれている。

その理由としては、

—それぞれの音程の倍音構成がすべて異なる。

—弦の太さによって高次倍音の音程が純正調の倍音係数よりシャープなものとなる。

—エンベロープ（音の立ち上がりから減衰に至る過程）の途中で、倍音構成が変化する。

—音楽以外のアクションその他の雑音に類する音が多く混じる。

などが考えられる。

良い音色とは、最終的には、人間の聴覚に頼らざるをえない。あるピアノ専門書は、現在の世界のピアノの音色を次のように比較している。

☆アメリカ製＝アメリカン・スタインウェイ、ボールドウィン、ハインツマンなどによって代表されるピアノは、ヨーロッパの楽器と比べた場合、明らかに明るい音色を持つ。

☆日本製＝ヨーロッパ諸国およびアメリカなどで広範囲に使われているが、ヤマハ、カワイで代表される通り、アメリカ製に音色が似ている。

☆フランス製＝ガボン、プレイエルは明るい音色には違いないが、異質の音質で力強さが欠けている。

☆ドイツ製＝ハンブルグのスタインウェイ、あるいはベヒシュタインは特に音色に丸みを持っている。最近ではウィーンのベーゼンドルファーも明るい音色に変わってきた。

#### 名ピアニスト深沢亮子の評価：

平成19年10月19日、岡谷市カノラホールで開催された「諏訪二葉高等学校創立100周年記念コンサート」で、同校保管松本ピアノ（明治44年製）を演奏。平成23年1月30日、松本ピアノ・オルガン保存会主催「松本ピアノ3世代コンサート」（於君津市民文化ホール）で、初代新吉製（明治43年）、二代目新治製（昭和3年）、三代目新一製（昭和56年）ピアノを演奏 演奏後の感想：低音域の響きがよく、軟らかくて良い音色ですね。

ピアノは構造が複雑であり、材質の経時変化などもあるので、定期的な調律が必要であり、製作以来数十年経過したピアノは、修復作業が必要になる。例えば明治時代に作られたピアノの修復には、新しいピアノ作りの数倍の時間を要し、費用も数倍になるという。松本新一は君津市に寄贈したピアノの修復【図5-2、5-3】を継続中であり、当会は修復を手伝い、修復の済んだピアノの音色を楽しむコンサートを開いている。君津市では松本ピアノコンサート開催回数に限度があるが、松本ピアノの音色を楽しむことができる。

上野の東京国立博物館には、国宝や重要文化財が展示され、何か見たいものが定まっている人には素晴らしい展示場だが、楽器の文化財は、音色を味わうことができなければ、文化財の意義が薄れる。

常代生まれの松本新吉が創作し、子孫が引き継いで作り続けたSweet tone松本ピアノは、君津市の誇るべき文化遺産であるとともに、我国のピアノ史上、貴重な文化財であると思う。

音色の良いピアノ作りの夢を持ち、それを作り上げた松本新吉の生涯と作品。その技を引き継ぎ、磨き上げた二代目、三代目の生涯と作品。これらの作品を展示し、誰でもピアノを弾いて音色を楽しむ「活きた文化遺産」として残したい。

## おわりに

明治33年(1900)に渡米してブラドベリーピアノ会社でピアノ作りの技をマスターし、帰国後、Sweet Toneを特長とする松本ピアノを製作した松本新吉は、ピアノ作り職人の域を超え、ドイツのマイスター(Meister：職人を教育できる名人)のような匠であった。ブラドベリーピアノ会社のF. G.スミス社長がMastercraftsmanと呼ばれたのと同じで、現代の無形文化財保有者(人間国宝)のような匠と云える。

松本新吉が創り出したSweet Toneピアノ手作りの技を、二代目新治、三代目新一が継承し、松本ピアノを今の世に残した。

松本ピアノが我が国の楽器歴史で輝く名品であること、製作者松本新吉が常代出身であり、新吉のオルガン製作師匠、西川虎吉も常代出身であること、二人とも夢を持ち、努力を重ねて夢を実現したことや、松本新吉の言葉を、次世代の人達に伝えたい。

松本新吉の言葉：

「何事も、他人の真似事ではいけない。自分の工夫で新しいものを作りだせ」

文化遺産「Sweet Tone 松本ピアノ」を自由に弾き、音色を楽しめるような展示会場設立が望まれる。

松本新吉がアメリカから帰国し、ピアノを作り始めてから孫の新一まで約100年続いた松本ピアノ作りは、松本ピアノ作り三代それぞれの夫人が支えた。

『音楽之友』に投稿した論文に新吉が「私は、ピアノの製造には、一身、一家を抛<sup>ナツク</sup>って顧みない覚悟です」と書いたように、新吉はピアノ作りに熱中し、二代目新治、三代目新一もピアノ作りに集中した。それを、初代新吉の先妻るい、後妻つね、二代目新治の妻和子、三代目新一の妻衣子が支えた。

八重原工場を継いだ二代目新治が終戦後、昭和20年11月に亡くなり、新治の妻和子が跡を継いだ。終戦後の大不況を乗り越える和子の苦労は並大抵のものではなかった。八重原工場には新治の弟剛夫、従兄弟の幸雄(新吉の弟利助の長男)と小堀好等ベテラン職工がいたが、復員した元の職工も戻ってきた。戦時中に経験していた箆笥や下駄箱など家具類を作ることで、何とか家族と職工の生計を立てた。戦後の急速物価上昇時期に、和子は職工の給料に物価手当を加え、工場の皆で助け合い、苦況を乗り越えた。昭和21年後半に学校のピアノ・オルガン修理、調律の依頼が入り始め、昭和22年暮れにはピアノの注文も入ってきた。ピアノ作りを再開し、八重原工場製ピアノの音色を復活させた。和子の働きは目覚ましく、戦後の大不況を見事に乗り越え、八重原工場が復活した。三代目新一が作る松本ピアノMATSUMOTO & SONSの音色がよいことは、『音楽の友』(昭和51年)記事などで知れわたり、それが和子の働きの成果と言えよう。

新治亡き後、松本ピアノ作りの事業を引き継いで見事に果たした和子の働きは典型的だが、松本家の夫人は皆松本ピアノ製作事業を支えたことを付け加えたい。